

地域社会におけるグローバル化への対抗の実態

——東京都御蔵島村の事例——

小島孝夫

## はじめに

地域社会や集団間の生活文化の差異や共通性に関心を寄せてきた日本民俗学において、地域社会の変容に関する調査や研究は、地域社会や集団間の関係を明らかにするために不可欠なものであった。これまでの日本民俗学の研究成果は、こうした視座の基で考究されてきた事例が蓄積されてきたといっても過言ではないであろう。

本プロジェクト<sup>①</sup>において、グローバル化の展開にともなう地域社会のローカルな対抗の実態をあきらかにすることを目的とした筆者にとって、こうした視座は、当初、伝承や伝播という伝達手段を前提とした従来の日本民俗学の研究方法と何ら変わりのないものを感じられたが、本プロジェクトの一環として実施されたシンポジウム<sup>②</sup>や研究会等での検討を経ていくことで、従来の研究視座に、同時多発的に発生する文化や社会の変化を分析する視座を加えていくことの意義や必然性が理解されていくことになった。

従来の日本民俗学における地域社会や集団の研究は、当該社会や集団をあらかじめ共同体的なるものと想定して、それらがいかに安定した状態を維持してきたか、あるいは維持しようとしてきたかを明らかにすることに帰結することを想定したものであったということ、さらに、当該社会や集団内における完結性を前提とした議論に終始しがちであったということが理解されていたのである。日本民俗学の蓄積の多くが自治体史編纂事業などを背景としていたことなどを考え併せれば、当該地域社会という範囲で完結する視座を前提としがちだったのは致し方ないことであつたともいえよう。しかし、私たちが直面している社会の現状は急速に変化しており、広域空間で共時的に生起する事象からの影響を無視して現代社会の成り立ちを理解しようとすることは困難になりつつある、という現実を直視しないわけにはいかななくなつてきたのである。

筆者はこれまでにいくつかの自治体史編纂事業に参画したことがあり、そのことが契機となつて、編纂事業終了後も継続的に調査を続けている地域がある。小稿で事例とする東京都御蔵島村もその一つで、これまで御蔵島村の生活文化の変

化に関する報告等を行ってきたが、御蔵島村の生活文化の変化の分析に際しても、御蔵島村という一定の空間を占有する集団を、ある文化を共有する一様な集団として捉え、当該文化を共有しない集団を外的な存在として捉えていたため、御蔵島村の集団内部で生起している事象がどのようなものに対する対抗や受容を背景にしたものなのか、御蔵島村を構成する集団内の世代差や性差などを背景とする意識や価値観の多様性に対する視座が欠落しがちで、生活文化の変化の捉え方自体が一面的なものになっていたことが、本プロジェクトに関わることで強く自覚されることになった。

そこで、これまでに収集した御蔵島村の調査データを、御蔵島村の集団内の世代差や性差など個人の属性に留意しながら、再度分析しなおすことを試みた。取り上げる事例は新規のデータが十分に反映されていない点など猛省しなければならぬ点が多々あるが、本プロジェクトの狙いが、現在を「グローバル社会」と捉え、地域社会や地方文化がいかに再編されていくのかを検証しようとするものであることから、これまでの御蔵島村での調査で確認してきた日常生活の変化に関するデータを、御蔵島村における地域社会の再編の過程を示す指標として位置づけ、それらの背後にある島外からの影響と、それらに対する島内の対抗と受容とによる交錯状況の連続性を確認することを試みた。

御蔵島村には現在、イルカと一緒に泳ぐドルフィンスイム<sup>4</sup>を楽しむために毎年春から秋にかけて多くの観光客が訪れており、当該期間はすっかり観光の島と化している。こうした現象は平成五年（一九九三）頃から顕著になったもので、それ以前にはみられなかったことである。御蔵島村にドルフィンスイムが定着した過程を事例として、地域社会におけるグローバル化への対抗の実態を確認していくことにしたい。

以下では、第一章で御蔵島村におけるドルフィンスイムの概要を述べ、第二章では御蔵島村における社会生活の特徴を述べ、第三章では御蔵島村内で伝統的に行われてきた資源利用の実態と変化について述べ、第四章ではドルフィンスイムが共時的に行われるようになった背景を、島外社会に対する島内の集団や個人の受容や対抗という視点から分析を試み、離島社会におけるグローバル化への対抗の実態と交錯過程をグローバル化に対する共振母体となった集団に留意しながら述べていくことにする。



写真1 御蔵島全景

## 1. 御蔵島とドルフィンスイム

本稿で事例とする御蔵島は、近年、ドルフィンスイムを楽しむことができる島として知られるようになったが、それ以前は島内の資源を自給的に利用することを前提とした生活が特徴の島であった。

### (1) 御蔵島村の概要

伊豆諸島に属す御蔵島は東京都心から南方約二〇〇キロ沖合に位置する三宅島から、さらに十八キロ南方の太平洋上に位置する。東西五キロ、南北五・五キロのほぼ円形の島である。面積は二〇・五五平方キロ、島の周囲は十六・四キロで、島の周囲は標高百メートルから四八〇メートルにおよぶ断崖に囲まれており、島のほぼ中心に位置する標高八五一メートルの御山に高峰が連なり、島全体が急峻な山島的な景観を形成している。御山は雲に覆われることが多く、御山に源を発して島の八方に流れ落ちる河川は水量が豊富で、水力発電にも利用されている。

大正十二年に一島で御蔵島村となり、<sup>⑤</sup>現在は島の南端の里地区に集落が形成されている。平成二十二年一月一日現在の世帯数は一七二戸、人口は三〇九人で内訳は男性一七〇人・女性一三九人である。年齢別の人口構成をみると、年少人口五三人、生産年齢人口二一〇人、老年人口四六人であったが、平成二十二年八月一日現在の世帯数は一七五戸、人口は三二四人となり、人口構成にも変化が生じている。<sup>⑥</sup>





写真2 ドルフィンスイミングに出かける観光客

ている。二〇〇四年度までは午前六時から午後六時頃までの間に五回もイルカウォッチングの船を出すようなことが続いていたが、二〇〇五年度からイルカの保護と海上での事故防止を意図して、一回の出航時間を三時間までとし、さらに一日の出航回数を三回までに制限し、出港回数を示す旗を船ごとに掲げることになった。一回目は緑色、二回目は黄色、三回目は赤色とし、旗の管理と出納は観光協会が一律に行うことになった。二〇一〇年現在では、さらに登録船十五隻の出航回数を一日最大三〇隻までとするという制限のもとで操業している。<sup>(8)</sup>

また、定期的に観光協会の監視船が島の周囲を巡回し、乗員数が届出どおりであるかなどを確認することも行われている。もともと漁師ではない人たちがドルフィンスイムの担い手になっており、海洋についての経験や知識が十分でないことも自覚されており、こうした取り決めに対してもすばやく対応しているが、一方で「イルカが遊んでくれる」ことを期待している観光客たちの多様な要望を満たそうとすると、さまざまな無理が生じることが危惧されている。<sup>(9)</sup>とくに、特定の海域でイルカ船が競合してしまうことに対する調整の必要性については、観光協会が主催する講習会等で調整が図られている。

なお、一日に二回出航すると一日あたり十万円ほどの稼ぎになるというが、イルカに頻繁にストレスを与えることで、イルカが御蔵島から離れてしまうことが現実的な課題として危惧されており、観光業として永続的に続けていくためには一層慎重な対応が必要だといわれている。御蔵島村は平成十六年度から東京都とエコツーリズムの協定を結んだが、それにより、村は通年対応可能な観光資源開

発を模索しなければならぬことにもなった。冬季の交通手段に制約があることで保護されているともいえる、御蔵島の自然環境を新たな観光資源として再構築していく作業は、御蔵島にとっては矛盾することにもなりかねないとして、島内におけるエコツーリズムに対するコンセンサス作りを進めると同時に、観光協会が窓口になって東京都と協議を進めているという。観光業を安定した状態で維持するためには、島の人びとがこれまでの自然とのかかわりのなかで残してきた自然環境に対する自覚と評価とを共有することで、現在の状況をどのように維持していくのか、継承していくのかについて自戒していく機会が必要ではないかと考えられている。

御蔵島に限らず、物言わぬ野生生物を観光資源とする場合には、人間の側の身勝手な思い上がりや、野生生物に対して無自覚のうちに甚大な影響を与えているのかもしれないということにも、一層留意しなければならない。その結果は、突如として明瞭な形で顕在化してくるようになるからである。自然環境を保護しながら観光資源として活用していくエコツーリズムの思想は、周囲を海洋によって隔絶された離島にとつて地域社会の活性化への波及効果も期待できることから、離島にとつてもっとも有効な手法の一つであろう。そして、その実現のためには観光に直接関わらない人びとを含めて、島で生きようとする人びと全てが関わる形での、観光に対する取り組みに向けての議論が御蔵島村においても必要となつていく。

なぜ、御蔵島でドルフィンスイムが盛んになったのか。競合関係にあった三宅島の全島民が平成十二年に発生した雄山噴火によって島外に避難したことなど、外的な要因はいくつか指摘できるが、何よりも大きな理由は、御蔵島村内にドルフィンスイムに従事しようとする個人や家族がほぼ同時に現れたことである。後述するように、御蔵島では歴史的に年に数回しか本土からの船が着かない時代が長く続いており、島では個人の生活を護るために共同体の一員として協同することで生活や生計の維持を実現しようとしてきた時代が第二次世界大戦後まで続いた。

ところが、その後に離島振興法に基づく生活基盤整備がすすむと、本土との間での物資や情報の伝達方法の量や質が多様化し、共同体的なる集団を構成していた村民間に意識や価値観の差異が生じていくことになった。それらの差異は主に世代間で生じたもので、世代間の意識の差異が現在最も顕在化したものがドルフィンスイムを体験させるイルカ船経営への対応



であると考えることができるのである。

## 2. 御蔵島の社会

御蔵島村の基層的な生活文化を形成してきた背景には、離島という所与の自然環境に適應するために設けられた規範のよ  
うなものが存在したはずである。御蔵島でドルフィン・スィムが定着した事由を確認する手がかりとして、御蔵島村の社会に  
ついて確認しておきたい。

### (1) 「二十八軒衆」

『御蔵島島史』によれば、近世期から明治期にかけての人口等の推移は次のとおりである。<sup>10)</sup> 御蔵島が三宅島から独立した  
享保十年(一七二五)の戸数は二八戸で、人口は男五三人・女五四人の計一〇七人であったという。その後、寛政八年(一七九六)  
には戸数は二八戸のままであったが、人口は二〇六人まで増加したため、島で食糧を自給しながら安定した状態で生活でき  
る人口について危惧されるようになった。御蔵島にはこの当時二八戸しか在住していなかったようで、これらの家はジノモ  
ノあるいはジネンジョと呼ばれ、現在も「二十八軒衆」と呼ばれている。かつてはこれらの家では長男しか結婚できないと  
されており、家数と人口の制限が厳格に守られていた。百姓株を二八戸以上に増やさないようにすることもこうした過程で  
決していくことになった。二八戸の内訳は粟本(十戸)、広瀬(九戸)、徳山(六戸)、西川(二戸)、元は徳山姓であったが  
三宅島から婿を迎えて改姓したといわれている小林(二戸)<sup>11)</sup>で、同姓間での本分家関係の意識は弱く、各家は平等の立場であ  
ったという。安政二年(一八五五)までは二八戸のまま推移していたことが確認できるが、明治時代に入ると島外から木炭生  
産や林業に従事するために島に移住する者が加わり、明治八年(一八七五)には七六戸に増加し、人口は二五一人に増加し  
ている。さらに明治二十九年(一八九六)には南郷への移住が始まり、三一年には戸数七二、人口三〇二人となった。

長い間限られた家数の中で婚姻が繰り返されたため、各家の間には何がしかの婚姻関係があり、各家の関係は親密で、





写真3 ハカシヨ（墓所）

二八戸はみな親戚のようなものだという。冠婚葬祭に際しては、どこの家の場合でも、みなが仕事を休んで参加することが慣習となっていた。かつては島で一軒でも不幸があると、その年は全戸が喪に服すため、すべての神事が取りやめになったこともあった。

「二十八軒衆」と呼ばれる家には、祖霊であるトシヤマが祀られているという。それ以外の家にはジヌシガミ・ジヌシサマが祀られており、両者は次のように区別されていた。ジヌシガミは屋敷地の隅に祀られるその土地についた神で、屋敷地の空間を守護すると考えられている。家の鬼門にあたる位置に小さな丸石を立てて祀っている。それに対してトシヤマを祀る家は新たにジヌシガミを祀る施設を持つことをせず、トシヤマがジヌシガミをも兼ねると考えられている。トシヤマは玉石を祀ったり石祠を建てたりしているが、ジヌシガミのように鬼門に祀るといった規則性はないようで、家の横や裏などに祀られている。

島の畑は「二十八軒衆」が世襲で管理してきたもので、その後山林を一齐に開いて畑を造成したこともあった。ある家で畑を開くと、畑を作りたい人はその一定区画を借りて耕作した。借賃は手間で返した。畑作では台風が一番怖い。台風が来れば斜面の畑は土が流れてしまうし、野菜は風雨でたいい全滅してしまう。とくに六月台風は種矢いの台風と呼ばれる。南郷は温暖で、風や台風の影響も少なかったため、食料となる野菜類を大量に安定した状態で栽培することができた。サトイモ、ダイコン、シヨウガ、シイタケ、アシタバ、センブリなどが栽培された。南郷ではツゲもよく育ったという。畑作りは女たちと年寄りの仕事と



写真4 里集落の家並み

されていた。畑に行くのと隣接する畑の草取りもする。

(2) オオヤ・インキョ・サンキョ

居住地として利用できる土地が限られている御蔵島では、長男しか結婚できないという慣行が明治二十九年に南郷への移住が開始されるまで、永く続いていた。長男が結婚すると、両親は同じ屋敷内にあるインキョ（隠居）と呼ばれる家屋に、長男以外の子どもたちを連れて分住隠居をした。このことで両親は本家の家産や家督を長男夫婦に譲ることになる。長男は家長としてオオヤ（本家）を継承し、家計も本家とインキョとで分割して営むことになる。さらに長男夫婦の長男が結婚するとその長男夫婦に家を明け渡すということが繰り返され、長寿の家庭であれば、同じ敷地内に三世代が分住することにもなった。この場合は、祖父母の家をさらにサンキョと呼び分けた。別居していても家族としての絆は強く、家の労働は全員によって行うことが原則であったし、インキョの暮らしぶりについては長男の妻が何くれとなく面倒を見た。インキョの水汲みは長男の妻が必ず行った。祭礼などのモンピにはハレの食事を長男の妻が作り、インキョに届けた。インキョに移り住んだ次男以下の子どもたちは、他家の婿養子になるか嫁に行くしか結婚する方法がなく、機会に恵まれなければ一生インキョで過ごすことになった。

御蔵島において、現在でも親族として強く意識されているのは、インキョ、サンキョ（三居）、娘が嫁に行った家である。墓所に参る祭にもこれらの家の墓を順番に回っていくという。世代間の調整のためには隠居制度はうまく機能してきたと評価されている。親子に次いで緊密なのが、シンルイと呼ぶ親戚の関係であ

る。全戸が婚姻によって姻戚関係となっており、かつては全戸がシンルイであった。シンルイの中でも家を別に行っている兄弟姉妹や叔・伯父母、さらに嫁の実家をヤウチと呼び、相互をヤウチナカマとしてシンルイ以上に濃い親戚つきあいをした。分住別居しているオオエ・インキョ・サンキョの親子が共通に祀る屋敷神のことをジヌシガミまたはジヌシサマと呼ぶ。その祠の周囲にはクスやツゲなどの樹種を植え込んでおり聖域を思わせるような空間になっている。年神やトシヤマなどの名称を併せ持つのがみられ、複数の祭神を併祀する傾向がみられる。

オオエ・インキョ・サンキョは島内の伝統的な分住別居制度の呼称であると同時に、それぞれが住む家屋の呼称としても用いられている。母屋のことをオオヤとかオオエと呼ぶ。それぞれに付属する物置はナヤと呼ぶ。島の典型的な間取りは四間で、玄関に近い部屋がナカノマ、ナカノマの横の南に面した部屋はザシキ、ナカノマの奥の囲炉裏を敷設し、神棚やシラノタナやエビスなどの諸神を祀る棚がある部屋はイロリノマ、一番奥の納戸を兼ねた部屋はチョウデエと呼ばれた。ナカノマとイロリノマの西側は土間でそこが玄関となった。里集落から卯辰川を過ぎると、クラヤシキと呼ばれるほぼ同規模の平屋の板倉群が残っている。日用品や季節ごとの衣類、機具やかさばる道具類などが保管されている。現在は倉として利用している家はわずかになったが、かつては階段状に林立していたのだという。かつては家ごとに建てられていたというが、限られた空間を活用するために、倉の内部を本家とインキョとで分割して共用するなどというも行われた。冬間、気候の穏やかな南郷で避寒生活を送る習慣があった当時、避寒の時期を過ぎて里に戻ると、里の集落が火事で全焼していたという事件が端緒となり生まれた慣習であるという。万が一の火事や災害を考慮して、板倉を集落から離れた場所に設置することと併せて、住宅内の空間を広く活用する工夫でもあった。

### (3) 扶持米制度と共同作業

御蔵島をはじめとした伊豆諸島では、耕作地に適した土地が限られていたため常に食糧の確保に腐心しなければならなかった。そのため伊豆諸島の場合は作物による年貢納入は困難で、御蔵島の場合は絹を年貢として納めていたという。その後には内地でも絹生産が盛んになると、御蔵島の絹年貢は金納制に変えられていったようであるが、金の代わりに換金でき

る特産物を年貢として納めることが慣行となり、御蔵島の特産物として江戸に出荷されていたツゲ材を年貢として江戸に運ぶようになった。

その当時、御蔵島ではツゲ材を江戸に出荷し、島内で自給できない米などの食糧や生活必需品を購入していた。島内では貨幣はあまり流通していなかったようで、それらの江戸からの荷物は全島民の人数割で分配されたという。この扶持米制度は明治三十四年（一九〇一）まで続き、生活必需品を全島民で分かち合うことは暗黙の村是のようなものであった。現在の老年層の島民の中にはこうした意識を強く持ち続けている者がおり、それらの世代より若い世代においても、舂作業を体験した世代などには個人は島民全員の奉仕者であると考えてきた人たちが存在する。

このように、現在の島民の構成は、島内のみで生活してきた者、島で生まれ育ち島外での生活を経て島で暮らす者、他所から島に移り住んできた者に大別され、それぞれの集団に属す人びとはそれぞれが経験してきたことを判断や価値観の基準としており、それらが重層的に並存する形で現在の御蔵島の生活文化が形成されていると考えられる。そしてその基層には近世期から島の中で長年にわたり培われてきた伝統的な扶持米制度に根ざした生活文化の蓄積があり、それらが現在に至るまでの間の島内での社会的・文化的基盤となってきたのである。

村内で行われていた共同作業などもこうしたことが基盤となっている。新築や改築の際には村中の奉仕作業として、木の伐りだしから木挽き作業までをした。現在でも家屋に関することは村中の作業となる。村中が総出でやる仕事をムラブシンといった。砂利を撒いて道路の轍を直したりするミチブシン・ハマブシン・トイブシンもムラブシンとして行われた。かつてはムラブシン以外にも、ヤマダシ、フナイタカツギのような臨時の共同作業も行われた。また、村をあげてのムラブシンというものではないが、個人宅のジギョウツキやムネアゲ、ヤウツリなどの作業などは、親戚が集まるとほとんど全村民が揃うことにもなった。

里集落内の共同井戸は上町・中町・下町にある。井戸の位置により町名の区分がされているのではないかと。ただし、井戸の利用についての細かな決まりはなく、どの井戸から汲みだしてもよいことになっていた。水源から半分に分ったモ

ウソウチクをつないだ樋で井戸まで水を引いていた。井戸からバケツで水を甕や水桶にくみ出した。頭にワヤマルザをあてたり、手ぬぐいを丸めたものをあてて、水桶を自宅まで頭上運搬した。水汲みは通常朝夕二回行われた。井戸は中腰で作業ができるような高さに作られていた。島に水道が引かれると、下町の下に花田用の新たな井戸を作った。井戸には水源から樋で水を流すようにしてあった。樋の管理には、十二月にトヨブシン（樋普請）と呼ばれたモウソウチクを利用した樋の交換作業が行われた。樋が竹からトタンに変わるとトヨブシンは井戸の周りの清掃作業のようなものになった。

御蔵島の社会は、「二十八軒衆」を中心とした伝統的な集団によって維持されてきたのである。

### 3. 御蔵島における資源利用慣行

前述した御蔵島村の社会は、「二十八軒衆」の人びとが限られた島内の資源を安定した状態で利用し、生計を維持し続けることを目的として発達したものである。御蔵島の伝統的な生活を維持してきた資源利用を、概観してみると次のようになる。

#### (1) 植物資源の利用

御蔵島の森は水源地やカツオドリの繁殖地ということだけではなく、イルカが餌とする小魚をはぐくむ汽水域を維持するためにも、欠くことのできない存在である。御蔵島の森は水と多様な植物とカツオドリとを恵んでくれる。その背景となったものは、御蔵島の森をカミヤマと捉える概念が存在したからである。奥山を聖域と捉えることで、トメヤマなどの慣行が集落全体で維持されることになった。御蔵島では島内での資源の乱獲を防ぐことと資源分配の公平を図るため、シイの実採集やヘンゴ（シマテンナンショウ）採集、カツオドリ猟、イワノリ採取等にはクチアケという決まりがあり、それぞれの最適な採取日を判断して採捕活動の解禁日を定め、島民が一斉に作業を行った。

御蔵島の山林は後述する二十八軒衆とその親族とによって拓かれたもので、私有林の管理はそれらの家が行っている。現

在では、日常的に資源利用のために山林に入る機会が減少したことに加えて、管理者の高齢化により山林に入る機会自体が減少している。ツゲの利用は「二十八軒衆」に限られていた。御蔵島に自生するツゲは江戸時代以後の島の暮らしを支えてきた重要な特産物であった。島からツゲが搬出されたのは、宝永三年（一七〇六）頃といわれている。御蔵島の人びとにとってツゲはコメと同じような存在で、村の共同作業としてツゲの伐採と江戸への搬送を行い、その売却代金で食糧などの生活物資を購入し、それらを島内で分配することで島民の生活は維持されてきたといわれている。ツゲの古木には自然に特異な相が生じたアカモクやトラモクは、とくに珍重された。

ツゲは成長するのに大変長い時間がかかる樹種で、植栽してから伐採するまでに約百年かかるといわれており、そのために島民をあげてツゲの植栽に取り組み、ツゲをみだりに伐採することも禁じ、ツゲ山の資源保護に努めてきた。現在も産業センターなどでツゲの加工が行われているが、御蔵島に自生していたツゲの割合は減少してきているという。

御蔵島が三宅島の支配地となった貞享三年（一六八六）から三宅島から独立する享保十四年（一七二九）までの四十三年間に御山の五合目以下のツゲは三宅島役人の判断によりほとんどが切りつくされてしまったという。この時代は御蔵島の人びとにはツゲやツゲの出荷作業に対する十分な代償もたらされなくなり、十分な食糧や生活物資を確保できないという生活が強いられた。食糧の自給手段が限られていた島では、「百人超えたら油断するな」と人口増加を島民が互いに戒めるという自衛手段を講じることで、この時期の暮らしを維持した。御蔵島のツゲ生産は第二次世界大戦後まで盛んに行われ、昭和三十年代においても島の年間収入の四分の一を占めていた。

## （2）動物資源の利用

島でカツオドリと呼ばれるオオミズナギドリは、嘴と足ぐらいしか捨てる部位はないといわれてきた。肉は塩漬けに、ガラは塩辛に、油は食用油や灯火用油に、羽毛や翼は内地に出荷された。また、肉は三宅島の人びとから珍重され、米や餅との物々交換が行われた。御蔵島の人びとにとっては、重要な動物性蛋白源で、とくに第二次世界大戦後の食糧難に時代には、島民一人当たり千羽くらいを消費したことになるという。昭和五十三年に二七〇〇羽を捕獲したのを最後に、食糧利用を前



提とした捕獲活動は禁止され、島内の山林保全を前提とした駆除作業に切り替えられた。デドリと呼ばれる雛の巣立ち前に捕獲する。御蔵島では伝統的に貴重な蛋白源として利用されてきたカツオドリは島民共有の資源として、捕獲の日時や捕獲量について定め、違反する者を厳しく戒めてきた。

第二次世界大戦後は、十月末から十一月初めにかけて一日おきに計三日間、という条件で採捕が行われた。一日に五〇羽から七〇羽ずつ捕獲した。捕獲時期に合わせて、島の林務員が山中の道こしらえを行った。昭和五十年頃まではトリミといって、クチアケの数日前に雛鳥の成長具合を偵察する作業が行われた。巣の中の若鳥は一斉に巣立ちをしようことがあるため、クチアケの日程はトリミの結果により慎重に決められた。若い人ほどカツオドリの巣穴探しに山中の奥のほうまで行く慣行があった。カツオドリの捕獲は主に島内の三ヶ所で行われており、年寄りや川田周辺を、若い者は御山や川口やシントリヤマで捕獲作業をすることが慣例だったので、トリミが終わると山道の手入れなどをしてクチアケを待った。

戦前は三回まで口開けが行われたが、捕獲者の名簿を作成し、捕獲頭数を定めるなどして一定量の捕獲が続けられた。現在は十一月初旬に一日だけ、倒木や土砂崩れを防ぐことを目途とした一定数の駆除が行われている。動物性蛋白源を確保するために、村をあげてカツオドリの幼鳥の捕獲が行われた。この時期に捕獲するのは、六・七月頃に孵化した幼鳥がこの時期には巣穴から飛び立つ直前の最も脂肪を蓄えた状態になっており、食糧としての利用価値が高い上に、脂肪を蓄えているためにまだ巣穴から出ることができない体形であるためにこの時期を選んで捕獲した。ツワブキの花が咲くとカツオドリが飛び立つといわれており、親鳥は雛が巣立つ二週間ほど前に島を離れてしまうため、巣立ち前の捕獲は理に合ったものであった。また、巣立ち直後の幼鳥が村内の街路灯周辺に落下してくることも多く、山に採捕に行けない老人たちにも採捕する機会となった。カツオドリの捕獲は、御蔵島の人びとにとっては、食糧を自給するための手段であると同時に、捕獲から消費にいたるまでが一貫した生活文化でもあった。

カツオドリの捕獲は厳格な口開け制度により実施されていた。自動車がない時代には、夜半に第一回目の合図のサイレンが鳴ると島民たちはカツオドリを捕獲するための鍬などを背負い籠に入れて、村はずれの集合場所に集まった。二回目のサ



イレンの合図で、各々が自分の山に入り、夜が明けるのを待って捕獲作業を開始する。カツオドリはシイの木の根元に巣穴を掘っており、各々がそれらの穴の中から選んだ自分だけの捕獲場所を持っており、それらの巣穴を順次巡っていき、巣穴から雛を引き出す。人があまり入らない山域のカツオドリは、巣穴をあまり深く掘らないので、そうした巣穴を探していった。巣穴から巣立つ前の雛鳥は脂身がまだ残っているが、巣穴から出た若鳥は脂身が落ちてしまっており、風味が落ちるといふ。巣穴は通常一尋以上あるため、巣穴の入り口を掘り崩したりする場合もある。ただし、カツオドリの親鳥は毎年同じ巣穴で営巣するため、巣穴を取り崩すようなことはしない。巣穴の形状によつては、巣穴の奥まで雛をかき出す金具や腕が入るだけの穴を途中から掘りぬき、そこから雛をつかみ出す。捕獲作業を終えた巣穴は元通りの形状に戻し、次年度も猟ができるようにしておく。同じ親鳥が営巣を続ける限り同じ巣穴を利用して捕獲作業をおこなうことになる。雛はその場で首の関節を外して絶命させ、その日のうちに自宅と呼ぶハネ（肩肉）とアシ（腿肉）などに分けて、保存食とするための処理を済ませたという。車を使うようになってからの日程は、午前五時頃に家を出て、午前六時頃から捕獲作業を開始し昼を目安に山中での捕獲作業を終え、自宅に戻って処理を済ませてしまうという。カツオドリの捕獲は捕獲作業そのものの苦勞に加えて、山中での汚物処理、自宅に帰ってからの肉処理作業も大変な作業であるため、近年は捕獲作業に参加するのは十人ほどだといふ。

御蔵島では明治時代末期から昭和十六年頃にかけて養蚕が盛んに行われた。島内に自生していた豊富なクワを利用した養蚕はツゲの生産を上回るようになり、第二次世界大戦前までは一番の現金収入源であった。「蚕の稼ぎで一年分の買い物した」といふ。春蚕の時期には学校は養蚕休暇となった。特別に生産量の多い家をつくノウカと呼んだ。養蚕の技術は、群馬県安中市や藤岡市で学んだもので、御蔵島でかつて食べられていた「ホウロク焼き」といふお菓子の製法もこの過程で御蔵島にもたらされたといわれている。生産者は片倉製糸と契約を結んでおり、繭になるまで各家で蚕を育て、繭になると西の沢にあつた施設に集荷し、内地に出荷した。種繭の選別には東京から十人ほど選別担当者がきた。餌にするクワは主に段々畑のフチロやウルシロと呼ばれた畔にも植えて、土抱えを兼ねて利用した。

(3) 水産資源の利用

御蔵島における漁業は、漁撈活動自体が小規模で不定期なものであったため、元来が島内での自給を念頭に置いたもので、島外に出荷して現金収入を得るといえるものではなかった。このことは現在でも同様で、夏季に大量にタカベが漁獲された場合でもまず島内での受容が最優先され、家庭には二キロ、民宿などには五キロといった基準を決めて販売されている。

フナモトとフナコの関係は姻戚関係によって構成されていたが、その関係を拘束するような慣行は見られず、各家の長男を中心とした血縁による定常的な漁撈集団が世襲的に維持されてきた。御蔵島には水田がないため農耕における組織的な共同作業というものが希薄である。それに対して、小規模であっても漁撈活動においては共同作業の慣行が存続しており、複数の家を統合する機能を有していた。しかし、組合が自然消滅し、樹脂製の漁船が普及する過程で、漁撈活動も家族を単位にした労働形態に推移していくことになった。

出漁できるのは年間の三分の一度しかなく、出荷手段が船舶に限られていて出荷機会が不安定であるため、漁獲物は主に島内消費となり、漁業を専業とすることは困難であった。そのために大規模な資本を投下するような漁法の展開はみられず、個人単位の漁法が主体となっている。御蔵島の漁はワカレニシが止んで海面が凪いでくる四月頃から始まった。四月にはカツオの一本釣りが始まり、四月から九月までの期間はトビウオの棒受網漁も行われた。四月からの約一月は大振りなハルトビ漁が行われ、六月頃から九月にかけては小振りなナツトビ漁が行われた。五月から十月下旬にかけては断続的にテナガサ採取が行われた。五月頃からタカベ漁やトウゴ漁も始まった。梅雨が明ける七月頃から九月にかけて、イセエビの刺し網漁、ムロアジの棒受網漁、マグロ釣り漁、イカ釣り漁、コナガリ（トコブシ）採取が盛んに行われた。イルカは漁師にとっては魚網を破つたりすることから邪魔な存在だったが、イルカを食べる習慣が島民にはなかったため、突きん棒漁の対象にすることもなかった。御蔵島周辺に回遊してくる魚にはムロアジ・カツオ・トビウオなどがあり、根付きの魚にはタカベ・シマアジ・カンバチ・ヒラマサなどがある。

大正時代末から昭和時代初期頃まで御蔵島には主にタカベの敷き網漁に用いた艀漕ぎの漁船が四艘か五艘あったという。

それぞれの船はフナモト（船元）のもので、各船には主にフナモトの姻戚関係者によって構成された定常的なフナコ（船子）が組織されていた。昭和六年頃から艀漕ぎの漁船が発動機を搭載するようになると、フナモト・フナコ制度は次のように改められた。発動機の搭載や新船建造に際してフナモトが全額を負担するのではなく、旧制度の構成員であるフナコたちが組合員としてこれらの費用を分担して負担することで、新たな株組織を形成していくことになった。その実態は旧フナモト・フナコ組織が組合組織に改編されただけのこと、各家の長男は世襲的に組合員として漁業に従事していくことになった。南郷に居住していた次男以下はほとんど漁業に従事することはなかった。昭和十年頃にこれらの漁船が老朽化したため、三宅島で新船を建造したという。次いで昭和三十年頃には老朽化がすすんだため、再度新船を建造した。このときには三宅島の稲取から船大工を呼んで、島内で建造した。昭和三十年代後半になると若者たちの島外流出が激しくなり、漁撈活動自体が衰退し昭和四十二年（一九六七）頃に組合自体も自然消滅したという。

このように、昭和四十年代までの御蔵島村の生活は、所与の資源利用を前提としたものだったのである。

#### 4. 御蔵島におけるグローバル化への対抗の実態

先述してきた御蔵島の伝統的な生活文化は、一方で、不断の外部社会からの影響を受けたものでもあった。次に、御蔵島に居住してきた集団が外部からの影響に対してどのように対応してきたのかをみていこう。

(一) 御蔵島におけるグローバル化—離島が共振空間となっていた過程—

昭和四十年代の全国的な離島ブームの頃は、御蔵島の人口は減少していた。射爆場問題<sup>②</sup>で島内の人間関係の調和が乱れた時期であったことが事由として考えられる。その後に、島内での建設工事や電気工事が盛んになると歩調を合わせるように、内地からの帰島者が増え始めた。役場・学校・保育園などの職場には、内地からの就職希望者が増えていくことになった。昭和四十一年には里集落から離れた西の沢に教員住宅が完成し、この頃から、御蔵島は現金収入を得られる職場がある



写真5 御蔵島港と里集落

島に変化していった。昭和五十年代には島での自営生活を目指して帰島してくる人たちがみられるようになり、やがてこれらの人たちが民宿経営やドルフィンスイムに従事していくことになった。

「嫁に行くなら八丈島、婿に行くなら御蔵島」といわれたくらい、御蔵島では女たちがよく働いた。男たちの仕事は山仕事が主体で、集落内での作業のためこうした評価がうまれたものと考えられるが、実際に島の女たちはよく働いた。山の利用では近世から続いてきたツゲの生産に加えて炭焼きやハチジヨウグワの出荷、サクユリやニオイエビネランの出荷、次いで島内でのツゲ加工が行われ、農では養蚕、豚や牛の飼育が、海の利用ではムロアジの節作り、そして現在も盛んなドルフィンスイムへとそれぞれ推移してきた。昭和四十年代の離島ブームの頃は御蔵島には昭和三十一年に創業した旅館が一軒あっただけだったため、全国的な離島ブームが御蔵島の観光資源開発に直接は結びつかなかった。

昭和二十八年に離島振興法が施行され、御蔵島村においても三十三年には大根ヶ浜で港の起工式が挙行され、三十六年には都道工事が着手され、それ以後島内の交通は自動車の利用を前提としたものに変わっていった。都道の拡幅工事にともない路上の石仏をはじめ墓所の一部も改葬されることになった。それまでの島内の主要な道路は、浜と里を結ぶハマノミチ、里から島の東側を経て南郷にいたるオオミチ、里から島の西側を経て奥の院にいたる道であったが、それらがトドウと総称されるようになった。里集落の各家を結ぶ道は今もムラノミチと呼ばれている。ツゲの搬出やカツオドリの捕獲のために、ウト（杭）を用いてヨコオ



写真6 荷物船が着いた日の店先

タミチやウトミチとして階段状に整備したヤマノミチは、現在は利用する人間が限られており、その存在が忘れられつつある。ハマノミチとムラノミチに埋め込まれた玉石も大方が舗装工事の際にすっかり埋没してしまい、ムラノミチの一部にその名残が見られる。

明治二十四年（一八六三）に東京湾汽船（現東海汽船）が伊豆諸島に航路を設けた主要な目的は、御蔵島からのツゲを運搬するためだったという。昭和三十八年（一九六三）には三宅島・御蔵島間の連絡船として「みやま丸」が就航し、その後「えびね丸」に引き継がれていったが、三宅島の噴火による全島避難を機に両島間の連絡船は途絶えた。そのことが御蔵島におけるイルカウォッチングなどの島としての独自性を強調していくための契機ともなった。昭和五十九年には貨物船「弥栄丸」が就航した。この間に棧橋の延長工事が進展し、それまで島民の苦役の一つであった舂作業<sup>(13)</sup>が終わった。平成三年には大型客船「ストレチア丸」が就航し、観光客数も増加していった。かつては御蔵から東京まで十二時間もかかり、三宅島には船待ちのための宿があったが、不要なものとなった。それでも西風が卓越する季節には、船便は決行しがちであったため、島民の安定した生活を確保するために平成五年からヘリコプター航路も開設された。ヘリコプター航路の開設により、冬季に内地等から完全孤立してしまうことはほとんどなくなった。

毎週木曜日に三宅島からの貨物船が入港する。三宅島の噴火以降、貨物船の航路は大島経由の便に変更されたりされていた。荷揚げ当日は早朝から荷物の仕分

け作業や店頭での食料品の販売が行われる。とくに二軒の商店の軒先ではそれぞれの店にゆかりのある主婦たちが商品の陳列などを手伝いに集まるため、とりわけ賑わう。生鮮食品の購入については、一週間分の買いだめをすることになるので、店先では昼近くまで主婦たちの買い物が続く。この日は食堂も休みとなる。一方の店はツケで購入できるが、後発の店は現金払いのみである。客層の差異は、近隣の家が客となっていることに加えて、それぞれの店の親戚となる家が主要な客となっているようである。また、両方の店をまわる客もいる。

島内で初めて自動車が出たのは、昭和三十一年で発電所工事の際にオート三輪車が出た。御蔵島は伊豆七島の中で一番早く医者を出したといわれている。現在の御蔵島あたりに当時の病院があった。現在は常駐の医師に加えて、月に一度健診団が島に来ることになっている。急病人は緊急ヘリで内地に急送されている。

このように、御蔵島村は離島振興事業として展開した交通網等の整備により、島外社会とのつながりを強めていくことになっていったのである。

(2) 多層化する御蔵島村―御蔵島村における集団の多層化―

島外社会とのつながりは経済的な面だけではなく、通婚圏を拡げていくことにもなり、村内の世代構成にも変化が表れていった。

離島振興法施行後の昭和三十二年に川田水力発電所が完成し昼夜発電が可能になり、次いで簡易水道の敷設、電話の開通、さらに、港から仲町間の都道工事の竣工、棧橋の延長工事などが順次実施され、生活基盤の整備が急速にすすんだ。昭和五十三年には川田水源からの水道工事が完成し、内燃力発電所も稼動した。これらの生活基盤整備事業の進展により、女性の運搬作業に依存していた島内の生活が大きく変化していった。特徴的なことは、祝いの寄り合いを自宅でやらなくなったことで、ホテル（御蔵荘）で賄ってもらうことが多くなった。

食糧の自給手段が限られていた島では、「百人超えたら油断するな」と人口増加を互いに戒めるという自衛手段を講じることで、この時代の暮らしを維持したのだといわれている。具体的には長男以外の結婚分家を許さないという、苦渋に満ち



た人口抑制策をとることになり、この慣例は長く継承されていくことになった。昭和三十年頃までは島内婚ばかりだった。近隣の人たちの口利きでまとまることが多かった。それでも、島内の男女の数は限られているので、縁談をまとめるのは大変だった。家どうしでは、家格についてやかましく言うことは少なかったが、相手となる家の財産などを考慮して親が相手を決めていた。かつて、嫁入りの支度として嫁が婚家に持参したのは、米一俵と山の道具などの仕事道具であった。嫁にとって辛かった仕事は、畑づくりの作業とツゲの運搬だった。この頃は、御蔵島に嫁いできて逃げた嫁がいなくなった。給料で生活していくことができるようになったので、百姓も山仕事もなくなっていいようになったという。

かつては島内に加えて三宅島の坪田などから嫁いでもくることもあったが、現在では内地から嫁いで来た配偶者が半分以上を占めるようになり、昔からの御蔵のことがわからなくなってきた。村の産業センターなど現在は安定した現金収入源があるため、恵まれて自然環境のもので子育てをするために島に移り住んでくる人たちもいるという。かつては三宅島から嫁が来るだけでも「血が新しくなった」と言われ、島外者との通婚は島に新しい血が入ると歓迎されたが、一方で島外出身者との通婚の割合が多くなると、島の伝統を知らないことを揶揄して婚入者をガイジン、その子供たちをハーフと呼んだこともあったという。当初は揶揄するような意味合いが込められて用いられたガイジンという言葉は、次第に婚入者の人格や個性を評価する意味でも用いられるようになり、島の生活に変化をもたらしてくれる存在であることを評価する意味が込められていった。その後、婚入者や転入者が増えてくると、ガイジンという呼称は用いられなくなり、現在では、昭和五十年代に嫁いできた婚入者集団を指す呼称となっている。

島外から移入してきた人たちは、西の沢に造成されていた村営住宅に住むことになる。家族連れの教員や役場職員などが住む家屋として、約二十年前に建てられた。宅地空間の制限があるために、一戸建ての住宅を持つことはできないため、村の付き合いから隔離されているような気持ちになることもあれば、住宅での生活は住宅施設内で完結しているので気ままに感じるときもあったという。村営住宅に住む人たちどうし、次いで旧村の人たちとのあいだのプライバシーが気にならなくなると、お互いのことが自然にわかるようになって住みやすくなったという。しかし、村内の各集団間の同世代の



横のつながりは密になっても、各世代層を貫くつながりは希薄化していく傾向が生まれていった。

(3) 御蔵島村におけるグローバル化への対抗と受容―御蔵島村における共振現象―

御蔵島村と島外社会との関係は、資源の発見と管理の歴史と言い換えてもよい。御蔵島村では島外社会との均衡を保つために島内の産物を資源として活用してきた。なぜ御蔵島村では同時多発的な資源利用がおこなわれてきたのであろうか。

御蔵島村における資源利用の変化を島外社会との関係から整理することで、御蔵島村におけるグローバル化への対応の実態を確認してみたい。

御蔵島村では、商売などでの競争は共倒れになることが常に危惧されており、かつては新たな生産活動への模索に対しても慎重であった。御蔵島での日常的な生活における規範は助け合うことであり、とくに日々の消費生活である衣食住においては、女性たちの互助的な活動がみられた。これらの背景には、江戸時代から昭和十年代まで残っていた扶持米制度の遺風によって培われてきた共同生活に対する意識がその後も共有されてきた。村民たちは、「御蔵島は助け合いの島・お互い様の島」と考えており、島の暮らしは分け合うことが基本だった。御蔵島村の人たちは自分だけいいことができない性質で、珍しいものが手にはいると、島中に配らなければとするような気風があった。また、御蔵島では一軒が新しいものを購入すると、すぐに全戸が同じものを購入するような傾向があった。

かつて御蔵島ではお金を使う機会があまりなく、交際の手段としてお金のやり取りはしていなかった。何でもお金で済ませるようになったのは戦後からで、それまではお金の使いみちもなかった。島の中でお金を持つこと自体がなかった。昭和三十年代頃から現金に頼る生活が変わってきた。

また、昭和三十年代から四十年代にかけては、サクユリやニオイエビネランの出荷が盛んになり、私有林をはじめ村有林での採取が盛んに行われた。昭和四十年代には全国で「離島ブーム」が起こったが、御蔵島ではその当時は島の人口減少が進んでおり、観光客への対応に応じられるような準備は進まなかった。こうした島をめぐる変化などから、四十年代後半から公務員や建設会社の社員などとして帰島する者が増加するようになった。これにともない、昭和五十年代には観光業を前

提として帰島する者も現れ、自営で民宿経営やドルフィンスイムなどに従事するようになった。近年では、島内でも「イルカで一年分を稼ぐ」といわれるようになった。観光のために島に一日に百二十人も観光客が訪れるようになって、島の人の気持ちが変わってきたという。島にいて儲かるのなら観光にかかわる仕事をしようと考えた人が増えてきたのではないかと。

現在の島民の構成に注目すると、島内のみで生活してきた者、島で生まれ育ち島外での生活を経て島で暮らす者、他所から島に移り住んできた者に大別されるが、現在の御蔵島の生活文化が形成されてきた基点には、島の中で長年にわたり培われてきた伝統的な生活文化の蓄積があり、それらが現在に至るまでに島の内外の社会的・文化的影響の中で推移してきた。こうした視点で御蔵島の伝統的な生活文化を概観してみると、島の内的要素と外的要素とに分けて、次のような特徴を見出すことができる。前者については、江戸時代から続いてきた扶持米制度によって培われてきた協力を前提とした生活が、扶持米制度の崩壊とその後の換金を前提とした家ごとの生業の展開とにより、競争を前提とした生活に取って代わられていくという大きな流れがあった。扶持米制度という島全体を包括する価値観は、廃仏毀釈後の神道の伝統を全戸で守っていく背景にもなってきた。また、扶持米制度の名残を知る世代は、それぞれの生業の選択に際して常に共倒れすることを懸念するような意識を強く有していたが、こうした世代は次第に世代交代し、扶持米制度の体験のない世代が次第に家長となり、配偶者を島外から迎えることが多くなると、扶持米制度のなかで培われてきた全戸で協力する意識は次第に希薄なものになっていきつつある。後者については、離島という海によって隔絶された空間の中で資源として活用できるものを見出し、それらを安定した状態で永続的に利用することによって可能になっていた扶持米制度が維持されていた間は、島民は換金の対象をツゲという資源に特化していたが、その原則が崩れるとそれまで換金の対象としていなかった島内のさまざまな事象や事象に目を向けていくことになった。そして、換金の対象となったものは概して島外や内地からの需要に則したもので、木炭、ニオイエビネランなどの需要に対して利率的に対応していくような生産活動が展開されてきた。

#### (4) 御蔵島におけるグローバル化への対抗と受容の交錯

先述した「ハーフの子」という呼称は今から二十年ほど前に使われたものである。当時の当事者や家族にとっては、今もって忌まわしい呼称であることは想像に難くない。ここではこの呼称が内包してきた島民の意識について考えてみたい。

換言すると、この言葉が島の中で死語になっていないことの意義を考えてみたい。互いの呼称を「○○アニ」「○○ネエ」と呼び合う島内において、この言葉を最初に聞いたときの印象は何か非難するような言葉としての印象が強かった。ところが、少なくとも現在においては非難の言葉としてよりも、ある種の人格を評価したものとして用いられていることは明らかである。その契機となったのは、早朝のゴミ出しを待つ間に主婦たちの間で交わされる会話の中で、「ガイジン」と言葉がごく普通に交わされるのである。それらのやり取りは自分はジノモノではないからという遠慮の意味合いではなく、島内における当事者の立ち居地を互いが認め合うという意味合いが強く感じられる。

つまり「郷に入れば郷に従え」と強要もしないし、当事者も無理にわかったふりをしませんが、この意思表示として、「あなたはガイジンだから」、「私はガイジンだから」と主張しているのである。そして「ハーフ」もまた同様なのである。両者の間には互いに呼び合える関係が構築されているということなのである。多様化するなりわいのもとで多層化する社会において、人びとが共同体的なるつながりを形成していく前提がこうした他者としての互いの存在を認め合うことなのではないだろうか。そのように直近の二世代の関係を捉え直すと、御蔵島村におけるガイジン世代の立ち振る舞いの意味が理解できるのである。

現在、ドルフィンスイムを行っている十五軒の事業者の多くはガイジン世代を配偶者としている人たちである。内地出身で島で暮らすことを選択したガイジン世代がその配偶者とともに島の新しい資源としてイルカを発見し活用してきたということができるのである。島の中でガイジン世代を配偶者としている人びとが、内地の人びとに共振した結果が、現在の御蔵島のドルフィンスイムということになるのである。

島で生まれ育った老年世代と直近の世代との関係についてみてきたが、御蔵島にとって今後の課題となるのは、ガイジン世代以後の内地から家族で移り住んできた世代と他の世代とのつながりであろう。御蔵島の世代構成は、夫婦ともに島の出

身者、配偶者は島外出身者、夫婦ともに島外出身者という三集団によって構成されている。御蔵島村全体が、この三集団によって擬制的社会を形成しているともいえる。前者の二つの世代の後継者たちは島外で就職し家庭を持っている場合が多く、定年を迎えたら墓守のために、島に戻ろうと考えよといる人たちが多いという。ドルフィンスイムの従事している人びとはこの世代にあたる。それらの後継者世代の年代層は、島にとつては中枢を担う世代であるため、その代替世代の人びとを補充しなければ、島内のさまざまな活動に支障をきたすため、積極的に島外からの居住者を受け入れていくことになった。そして島外からの居住者の子どもたちの割合が増えていくことになり、その子どもたちも高校進学段階で島をあとにすることになる。こうした葛藤状況の中で島の日常生活は推移している。

現在の御蔵島が直面している課題は、島の後継者となる子どもたちの育成である。現在御蔵島で生活している子どもたちの多くは島外から移り住んできた家族たちの子どもたちである。この子どもたちは一定年数を島で過ごすことと親たちの転勤等により島をでてしまう子どもたちであるかも知れないのである。また、島で生活していったとしても、島内で受けられる教育は中学校までであるから、高校進学の段階で島を出て、その後の進路によっては島には戻ってこないという可能性もあるのである。かつての島での学校教育は、島で生まれて育つたことをコンプレックスとして植えつけてしまうような側面があった。島の良さを自覚することよりも、島で暮らすことの不利を自覚することになったという。そのため現在まで島内での教育の目標は御蔵島で生まれ育つたことを誇りに思える子どもたちを育てることになってきている。ところが、生粋の御蔵っ子もいなくなってしまう、御蔵の言葉を使う子どももいなくなってしまう現状では、いずれ内地に戻るであろう子どもたちを対象に教育活動を行うという状況が生じてしまうのである。小学校に通う子どもたちの八割を島外出身者の子どもたちが占めるようになった。子どもの付き合いを介して、大人たちの付き合いが広がっていくようになり、多くの島民は子弟が在学していなくても学校行事に積極的に参加しているが、こうした現実を島民全体が自覚しないわけにはいかない現状である。御蔵島村全体が擬制的な社会となりつつあるのである。

島外出身者はジノモノに対してどうしても遠慮がちで、島外出身者は決まった席がないような不安定な立場を意識するこ



写真7 帰京する観光客

とがあるという。こうした意識の背景にあるのは、島で暮らし続けようとしても結局自分の宅地をもてないという制約があるからのようである。島では二十八軒衆とそれから派生した親族により里集落の宅地は埋め尽くされており、新たな住民は全て村が提供する集合住宅に住まなければならない。子どもの成長に合わせて新たな住宅を得たいと思っても、社宅住まいのような生活を続けなければならないのである。現在の御蔵島は在住者間の世代を貫く関係の再構築という課題に加えて、島外から観光目的のために断続的に島にやってくる観光客との間の関係の再構築という課題にも直面することになった。

御蔵島に限らず現代社会で生活するということは、自分という存在が他者との関係によって成り立っているということに自覚しないまま生きていくことが可能である。人の意識は多層的で、現実生活している社会においては共同体の一員として非個人主義的な精神を受け入れ、現実を超えた関係の中では一人で生きる個人主義的な自由な精神を受け入れている。合理的な考え方や論理的方法を受け入れながら、一方では非合理的なものや非論理的なものを重層的に受け入れることで私たちの生活は成り立っているのである。地域社会もまた同様なのである。そのように御蔵島村の現在の生活を捉えなおしてみると、共同体として形成されていた集団が必ずしもある共通した意識を永続的に共有してきたわけではなく、島内外で生起する事象に対して、段階的に自在に他者とながっていく手段を構築していくことが同調する集団を共振させる形で推移してきたと捉えることができる。

## おわりに

御蔵島村の伝統的な生活文化を対象に、断絶したり、衰退したり、あるいは変容しながら今日まで継承されている事象や新たに創出されてきた事象について述べてきた。こうした推移の結果として現在の御蔵島の生活が形成されているということとを念頭に置けば、御蔵島村に比べて一層錯綜しているように思いがちな現代社会においても、現在にいたるまでの変容の結節点がどのような要因を契機として発生し、それらに対して先人たちがどのような評価や判断を行い、その結果として現在に至る生活文化の核となるものが受容されてきたのかということも確認することができよう。

平成五年から本格的に始まった御蔵島村のドルフィンスイムは、島外出身者を配偶者とした世帯主が中心となって展開してきたようである。本土の人びとの需要に敏感に共振する配偶者を得たことで、本土の人たちの離島への眼差しを理解し人びとが中心となって展開してきたと捉えることができるのではないか。

しかし、これだけでは村内で同時多発的にドルフィンスイムが開始された理由にはならない。御蔵島村内で長年にわたりに培われた生活の基盤とでもいうべきものがあつたからこそ、共振的な反応が可能になったのだといえる。そして、共振の対象は、共同体的な生活が続いていた時代は、村内全体が共振するような状態が続き、村内の生活が多様化し、さまざま生活の型が選択できるようになると、それぞれの事情により共振する対象や主体となる集団も、共振の振れ幅も変化していったということになる。

御蔵島村における資源利用の推移を島外から需要に対する対抗と捉えていくと、ツゲの伐採、ニオイエビネランやサクユリの採集と出荷は全村が共振した事例ということになろうし、近年ではわずか数戸でしか行われていないカツオドリの駆除は全村あげて共振していたものが特定の人たちの間での共振に変わった事例とみることができよう。そして、ドルフィンスイムの受容は御蔵島村における特定の人びとの間での共振によって受容されたものとみることができよう。そして、共振する



集団が世代単位に分断されつつある様子が顕在化してきている。このような視点で地域社会における価値観や評価等の受容のあり方を捉えなおしてみると、伝承や伝播という概念に代表される伝達の捉え方とは異なる、受容の過程自体を検証する視座を新たに加えていくことの必要性が理解されるのである。

註

- (1) 平成二〇年度～二二年度「私立大学戦略的研究基盤形成事業」「グローバル化時代に再編する日本の社会・文化に関する地域・領域横断的研究（研究代表：松崎憲三）」
- (2) その成果は、上杉富之・及川祥平編『グローバル研究の可能性―社会的・文化的な対称性の回復に向けて―』成城大学民俗学研究所グローバル研究センター 二〇〇九年、に詳しい。
- (3) 「民俗」御蔵島村編『御蔵島島史』御蔵島村 二〇〇六年、「地域社会の変容と共同体の再構築―東京都御蔵島村を事例として―」成城大学大学院文学研究科編『日本常民文化研究紀要』第二六輯、二〇〇七年、「離島のくらしと変容」『海と里』吉川弘文館、二〇〇八年において、御蔵島村の日常生活のなりたちを明らかにすることを目的として、御蔵島村における日常生活の変化について記述してきた。
- (4) 御蔵島におけるドルフィンスイムの特徴は、イルカが生息する海域で泳ぐことができることである。乗船人数十名程の船で出航し、島の沖合二百～三百メートルを一周すると、イルカの群れに遭遇することができる。乗船人数十名程の船で出航し、島の沖合二百～三百メートルを一周すると、イルカの群れに遭遇することができる。
- (5) この年に伊豆諸島のうち利島、神津島、三宅島に「沖縄県間切島並伊豆諸島及小笠原島ニ於ケル名称区域ノ変更等ニ関スル件」が適用され、御蔵島にも十二月一日から島しょ町村制が施行された。
- (6) 御蔵島村では平成二十一年度に五人が出生し、平成二十二年度には九人の出生が見込まれていることから、島内の人口構成に変化が生じつつある。
- (7) 御蔵島周辺に生息しているイルカはミナミハンドウイルカで、国内では天草、奄美大島、小笠原、錦江湾、能登島などでも観察できるといふ。



(8) 小木万希「御蔵島のイルカウォッチング」小島孝夫編『クジラと日本人の物語―沿岸捕鯨再考―』東京書房 二〇〇九年  
二二七～二二九頁。

(9) 御蔵島観光協会によれば、一九九四年から二〇〇九年までの十六年間の個体識別調査で、二二二頭のイルカが確認され、二〇〇〇年頃は百六〇頭前後の頭数が確認されていたが、二〇〇九年には一四〇頭ほどまでに減少しており、ドルフィンスイムなどがイルカに与えるストレスなどが現実的なものになってきていることが危惧されている。

(10) 御蔵島村編刊『御蔵島島史』二〇〇六年 一三二五～一三三九頁。

(11) 栗本惣吉『増補御蔵島の社会と生活』西田書店 二〇〇八年 一四一頁。

(12) 昭和三十九年一月十九日に御蔵島に米軍射爆場が設置されることが新聞報道され、村内は紛糾した。二月八日には村民大会が開催され、賛否の投票が行われた。賛成七、反対八九、白票四という結果になった。五月一日に防衛施設庁は東京都を通じて候補地から外すことを通知してきたが、島内には賛否をめぐらしこりが残ることになった。有吉佐和子の小説『海暗』はこの事件をモチーフとしている。

(13) 島に暮らす青年たちの大きな役割は舳作業で、島の沖合に停泊した船まで麻綱を泳いで曳いていくことが若者たちの仕事であった。船と棧橋とをロープで結び、そのロープ伝いに舳を移動させた。昭和三十年代に入るとウエットスーツが導入され、ロープも麻から浮力のつよいハイデックスに代わったため、作業は幾分軽減されたが、若者たちへの負担は大きく、若者たちが島を出る遠因になった。